
ムチと決闘とご褒美と（僕は使い魔？その3）

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムチと決闘とご褒美と（僕は使い魔？その3）

【Nコード】

N9719C

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

ルイズの暴走の後始末に、水瀬は決闘の場に引き出されました。……どうなるのでしょうか？というわけで、『ゼロの使い魔』ファンフィクション「僕は使い魔？」四部作の第三部です。

「あんたをシツケてやる」

怒り心頭のルイズが、水瀬にそう言った。

「使い魔としての心意気ってモノを、叩き込んでやる」

その目はどつかりと座っている。

かなり座り心地のいいところを見つけたようだ。

きつとあぐらでもかいているに違いない。

……“あぐらをかく”の“かく”って、どんな漢字だっけ？

水瀬がそう思った時だ。

ガチャッ

水瀬の首に、何かがかかった。

「？」

首輪だと、すぐにわかった……というか、わからない方がどうかしている。

「何？これ」

「使い魔の必需品」

首輪に鎖がつなげられ、ルイズが力任せにそれをひっぱった。

「さあ——遅刻するわよ？」

結局。

これがまずかったんだろうなあ。

水瀬はそう思いながら、相手を見た。

金の巻き髪に、フリルのついたシャツ。

宝塚でもあるまいに、普通にいたら病院に収容すべき格好だと思
う男。

その頬には未だ残る傷がある。

理由はこうだ。

昼、お腹の空いた水瀬が、ルイズの目を盗んで皿に残っていた料
理を食べた。

ところが、それはルイズが楽しみにしていた逸品。

怒り狂ったルイズが水瀬にムチを振るいまくった。

食堂でそんなものを振り回したおかげで、水瀬以外にもムチの一
撃を浴びた者が当然出てきた。

その中の一人が、この男、ギーシュなのだ。

ギーシュの言い分はこうだ。

貴族同士とはいえ、男子として面に傷を受け、黙っていることは
出来ない。

あまつさえ、ムチを避けるために逃げようとした、連れの女の子
がスープをひっくり返して服を台無しにしたことは、それ以上に我
慢がならない。

ルイズは女性であるから、その使い魔と決闘して、その罪を償わ
せる。

あまりのことにオロオロするルイズに代わってギーシュと対峙し
た水瀬の言い分はこうだ。

ルイズに文句を言って欲しい。

僕だってムチを振るわれた被害者だ。

女の子が服を台無しにしたことについては気の毒と思うが、ギー

シュがムチを顔に受けたのは、逃げようとする女の子に、どさくさまぎれに抱きつこうとしたからで、加えて言うなら、男子としてムチの一撃もロクに避けられなかったことこそ、恥すべきだ。

大凡において、水瀬の言い分の方が、周囲に支持された。

というか、「あのオンナは誰ですの!？」と数多い女子生徒に詰め寄られたギーシュが、その場から逃げるために決闘という方便を使ったことは明白なのだ。

今、水瀬はギーシュに連れられる形で、広場にいる。

あまり日が差さない、決闘には打って付けの場所。ただ、騒ぎを聞きつけた生徒達によって黒山の人だかりが出来上がっている。

「——それで？」

水瀬は訊ねた。

「どういう方法で？」

ギーシュは無言で持っていた薔薇の花を振った。

水瀬の目の前で花びらが一枚、宙を舞ったかと思うと……。

甲冑を着た女戦士の形をした、人形になった。

身長は人間と同じくらいだが、固い金属のようだ。淡い陽光を受け、その肌——甲冑がきらめいた。

「……式神？」

怪訝そうな顔をする水瀬に、ギーシュは言った。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「これ……何？」

興味深そうに人形をつつく水瀬。

「言い忘れていたね。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。

青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「ふうん？」

水瀬はそれがゴーレムと言われながら、ゴーレムをペタペタと触

るのを止めない。

「やはり平民となれば、ゴーレムなんて初めてかい？」

「こういうのはね」

言いつつ、水瀬はゴーレムから離れた。

「ところで」

ある程度の間合いをとった水瀬は言った。

「僕は、何で決闘に応じればいいの？」

「お好きなように」

「剣位、貸してくれてもよくない？」

水瀬の視線は、ギーシュの腰の剣に注がれる。

「ダメッ！」

水瀬を止めようとするのは、ルイズだ。

「ギーシュ！やめて！決闘は禁止されていし、元を正せば私が！」

水瀬の服を掴んで、なんとかこの場から引き剥がそうとするルイズはそう言うが、

「禁止されているのは、貴族同士の決闘のみだよ。平民と貴族の間の決闘なんて、誰も禁止していない」

ギーシュは剣を抜いて歩くと、地面に剣を突き立てた。

「使いたまえ」

剣を掴み、握り具合を確かめた水瀬が言った。

「折っても知らないよ？」

さすが貴族の剣か。具合はそれほど悪くないらしい。

水瀬はその剣を持ったまま、近くにある石のオブジェに近づいた。その側にいた生徒達が、慌てて道をあける。

「逃げるのか？」

「試すだけ」

ギーシュにそう告げた水瀬は、剣を軽く振った。そう。

軽く——だ。

シュンッ
シュンッ
シュンッ

風を切る音だけが、あたりの観客達の声にかき消されるように響く。

さすがに石は切れない。

皆がそう思った途端――。

パキンッ

剣が粉々に碎け、同時に、バラバラになったオブジェが崩れ落ちた。

「あーあ」

水瀬は折れた剣を残念そうに見つめ、申し訳なさそうに、ギーシュへ振り返った。

「ごめんなさい。折れちゃった」

「だから止めるっていったでしょう!」

ルイズが水瀬に怒鳴る中、

「……」

ゴクリ。

ギーシュは生唾を飲み込んだ。
自分が怯えているのがわかる。
何故?

相手の剣だ。

太刀筋が全く見えなかった。

まともにやれば、間違いなく斬られていた。
それに、あの石造りのオブジェを剣で斬つてのけた腕前……。

「ま……まあ」

幸い。

ギーシュは気を取り直した。

剣は折れた。

だから、心配はいらない。

相手が新しい武器を求める前に、やればいい！

だから――

「決闘だ！」

ギーシュは、6体のゴーレムを追加で発生させ、水瀬めがけて襲わせた。

先手必勝！

数こそ正義！

それがギーシュの答え。

貴族が平民にやられるなんて、あつてはならないことだ。

否。

あり得ないことだ。

だから――

ギーシュは水瀬めがけてゴーレムの拳を振り下ろさせた。

「やめてっ！」

次の瞬間、水瀬をかばうように、ゴーレム達の前に飛び出したのは——ルイズだ。

居合わせた観客全員が、ルイズの頭が潰されるのを予想し、目をつむった。

「無茶だよ」

己の死を覚悟したルイズの耳に、そう語りかける声。

「——えっ？」

強くつむった目をあけたルイズは、自分が生きている。そして、水瀬に抱きかかえられていることに気づいた。

「アタマ、つぶれちゃうよ？」

「——あ、アンタ、どうやって」

見ると、ゴーレム達とは少し離れた場所にいた。

驚くルイズを地面に下ろし、水瀬はギーシュに厳しい視線を向けた。

「決闘は対一が原則、周囲に女性がいるのを知った上で攻撃に出るなんて、貴族の男のすることじゃありませんっ！」

「そうだそうだ！」

「なんてことするんだ！」

ルイズの無事を知った観客達が、安堵の次に口からはき出したのは、水瀬への賛辞と、ギーシュへの非難の言葉だ。

「自分が望んで飛び出した。そこまで面倒は見きれない」

「それでもなお、ご婦人の安全を守るのが貴族の男子の務めでは？」

よく言った！
いいぞ！

やんやの大喝采を受ける水瀬だが、その目は厳しい。

怒っているのだ。

「大体、決闘なんて」

どこから取り出したのか、水瀬は別な剣を抜いた。

「命を遊ぶ愚物の道楽」

シュンッ！

太刀筋は見えない。

ただ、水瀬を包囲するように立っていたゴーレム達が一瞬で粉々にされたのは、否定のしようのない事実だ。

「——命のやりとりの重さを知らないバカモノめ」

その重々しい声。

その殺気。

それは、女の子から発せられるものではない。

「——っ！」

ギーシュは、自分が後ずさっていることを知った。
目の前の相手に、自分が気圧されている。

違う！

恐れているのだ！

このままなら——殺される！

ギーシュの中の軍人としての血が、警告する。
逃げる！と。

だが——

逃げない。

逃げられない。

逃げ場がない。

逃げることは出来ない！

袋小路に追いつめられたネズミ同然の境遇だ。

平民相手に口々に戦わずに逃げれば、貴族の面子は丸つぶれだ。

逃げられない！

理性はそう叫ぶ。

だが、ギーシュの意志に反して、足はもう一歩、後ろに下がった。
その途端！

ドンッ！

ギーシュは、背後からの一撃を受け、吹き飛ばされた。

「うつ……」

それが、背後に回った水瀬に蹴られたと気づくことさえ出来ず、
地面に叩き付けられたギーシュの目の前。

ドンッ

鈍い音を立て、そこに落とされたのは、

青銅のゴーレムの首。

「なっ!？」

それは、自分を守ってくれる唯一の存在。
驚愕するギーシュの首元に、刀の切っ先が突きつけられた。

「——遺言、聞いてあげる。どうぞ？」

ギーシュは唇を噛みしめ、言った。

「——参った」

「ち、ちよっと!」

その場から去ろうとした水瀬を止めたのはルイズだ。

「何ですか？」

観客の生徒達がやんやの大喝采を浴びせる中、ルイズは赤面していた。

「勝ったんですよ？」

水瀬は不思議そうにそう言うが、

「だっ、だって!」

自由の効かない体を恥ずかしさのあまりよじらせるルイズ。

「だからって、何で私がこんな格好で!？」

「そりゃ、ご主人様ですよ？」

水瀬はルイズをお姫様だっこしたままで言った。

「ご主人様を歩かせるわけにはいきません」

「……」

みんなの視線を感じるルイズは気を紛らわせるために別の話題を振った。

「あ、あんだ、剣の修行受けたの？」

「それはまあ」

「どうやったら、青銅のゴーレムをあんな紙細工みたいに」
自分の使い魔と対峙したゴーレムは7体。

その全てが、何の抵抗も出来ないまま、使い魔によりズタズタにされた。

「あんなの……スゴすぎる。騎士団だってあそこまで」

水瀬は微笑みながら言った。

「さあ？」

その微笑みが、ルイズに奇妙に安堵感を与える。

この子は使い魔だ！

そう言い聞かせようとしても、うまくいかない。

今は、不思議とこうしているのが——心地いい。

ルイズはため息一つ、水瀬に体を預けた。

使い魔が決闘に勝利した。

その主として、この程度のご褒美は認められるべきだろうと。

「ところでご主人様？」

「ご褒美に、ご飯のメニュー、増やしてください」

「クセになるからダメ」

その日の夕食。

水瀬のスープには、それまで入ったことのない肉が入っていたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719c/>

ムチと決闘とご褒美と（僕は使い魔？その3）

2010年10月15日22時54分発行